

〈書評〉

小池洋一・田村梨花 編著

# 『抵抗と創造の森アマゾン —持続的な開発と民衆の運動』

現代企画室 2017年

帝京大学 千代勇一

## 1. はじめに

本書の目的は、ブラジル・アマゾンにおける従来の略奪的な開発とそれによって引き起こされてきた環境破壊に対して、持続可能な社会を模索する民衆運動を紹介することである。アマゾンは、西洋による「発見」以降、外部の人々の欲望を満たすために収奪され続けてきた。その結果、森林が広範囲にわたって伐採され、地球の温暖化は加速し、そして温暖化は異常気象を引き起こしてさらなる環境破壊へと繋がってきた。また、莫大な富をもたらす資源の開発は自然環境の破壊だけでなく、森林とともに生きてきた人々を抑圧し、その人権は蹂躪されてきた。これに対してブラジル・アマゾンに生きる人々は、森林や生物の多様性を保持しつつ、社会的に公正な経済を模索する民衆運動を展開している。この「森林とともに生きてきた人々」とは先住民だけではない。ゴム樹液採取労働者（セリングイロ）や零細農民、土地なし農民など多様であるが、いずれも森林とともに生きていこうとする点で共通している。したがって、暴力的な開発に対する抵抗も、持続可能な社会の創造も、その形は様々であり、本書はその多様な民衆の運動を描いている。

また、日本との関係も強く意識されていることも留意すべき点である。たとえば、我々が消費している大豆やアサイがブラジル・アマゾンの農業に影響を及ぼしていること、日本の政府機関や民間企業が農業プロジェクトに資金援助または投資していること、そして日系の農業実践者や企業が推進してきた民衆運動があることなどが言及されており、ブラジル・アマゾンで起きていることと我々が無関係でないことを改めて思い起こさせている。このことはあとがきに記されているように、「深刻化する環境問題に立ち向かうには、遠い二つの世界で生じている事象の関係性を想像し理解することから始める必要がある（本書 p.316）」からであり、抵抗と創造がアマゾンだけではなく、我々の日常生活にも求められていることを示している。

## 2. 本書の構成と各章の概要

本書は、著名な民衆運動の活動家であったシコ・メンデスの後継者として環境運動を実践してきたマリナ・シルヴァ元環境相からのメッセージ、序章とあとがき、10の章、そして付属資料としてアマゾンとブラジル年表と略語集から構成されている。本書では多くの章でアマゾンの開発と環境破壊の歴史、そして民衆運動の動向に関する記述があり、また数々の政府機関、民間団体、プロジェクト等の略語が使われているため、巻末の年表と略語集はとても有益である。なお、第1章から第3章まではこれまでの破壊的な開発のオルタナティブとしての農業実践と位置づけられるアグロエコロジー、採取経済保護区、アグロフォレストリーの事例が紹介されている。第4章から第10章までは、それぞれ先住民族、ダム建設、土地なし農民運動、ソーシャルデザイン、フェアトレード、市民教育、森林の再生と多彩なテーマが扱われている。各章の概要は序章においてまとめられてはいるが、評者なりに各章を簡潔に紹介する。

序章「アマゾン開発と民衆運動」では、まず本書のテーマの背景となるアマゾンの開発史、森林の破壊と気候変動の関係、政府の保全対策の変遷がまとめられている。続いてこれに対するゴム樹液採取労働者、先住民、土地なし農民などによる民衆運動の形成と展開を概観し、最後に各章の概要と位置付けがなされている。また、本書における民衆運動が、大土地所有制や新自由主義に対する抵抗であると同時に、これまでの開発、社会や生活のあり方に対するオルタナティブの創造であることが明示されている。

第1章「アグロエコロジーがアマゾンを救う」は、オルタナティブな農業としてアグロエコロジーの実践を紹介している。大豆に代表される輸出志向の大規模な農業は土地の収奪を促進し、遺伝子組み換え農業による環境破壊が懸念されるなど、従来の農業は結果として環境や社会に問題を引き起こしてきた。そこでこれに代わる農業として、環境への負荷は小さいが生産性の高い伝統的な農法が注目され、アグロエコロジーと名付けられ実践されている。アグロエコロジーは農法だけでなく、農民の主体性や女性の権利獲得などを実現することを目指す社会運動である。

第2章「採取経済と森の持続的利用」は、ゴム樹液採取労働者による森林を保護しながら持続的に利用する試みを紹介している。ゴムの樹液採取労働者は19世紀半ば以降のゴムブームの中でアマゾンに定着していった人々であるが、その経済活動は「生態系の再生能力の範囲内にとどめることによって、自然資源を持続的に利用する(本書 p.72)」という意味で、オルタナティブな農法である。20世紀後半の大規模な開発が押し寄せる中で、ゴムの樹液採取労働者の抵抗運動は資源の共同管理を目指す採取経済保護区の設立へと至った。「コモンズの悲劇」論を踏まえて、採取経済保護区の問題と可能性を考察している。

第3章「アグロフォレストリー：人と森が共生する農業」もオルタナティブな農

法の事例である。アグロフォレストリーは樹木の植栽と作物の栽培や家畜の飼育を組み合わせることで、森林を保護しつつ農業と林業を実践する持続可能な農業として世界各地で実践されてきた。本章が対象とするのは日系農業者によるトメアス式と呼ばれる、荒廃した状況からの森林の再生のプロセスに経済的価値のある植物を混植するものであり、そこから収入を得られる農民は長期間にわたってアグロフォレストリーを実践することが可能となる。その結果「森の番人」となっていく。このモデルは日本人移民が現地の伝統的な生活様式に工夫を加えて確立し、その成功によって他の地域にも導入されている。

第4章「先住民の現在と主体的で持続可能な未来」は、シンガー川流域の先住民を対象として、開発によって置かれた厳しい現状と其中で模索する自然と人間の調和の場を紹介している。アマゾンの先住民は植民地期以降の虐殺や病気によって大きく人口を減らしたが、その後も道路建設とともに始まる大規模な農牧業、地下資源採掘によって生活の場を失い、さらに貨幣経済の浸透などにより社会変容を余儀なくされてきた。これに対して、国内外の諸団体の支援を受けて実践している養蜂事業と消防団事業は、森林を守り自然と調和する持続可能な開発の試みと位置づけられる。

第5章「ペロモンテ水力発電所と先住民」では、自然環境や先住民の居住地に影響が及ぶペロモンテ水力発電所の建設を巡る政府と事業者に対する先住民の闘いが詳細に記述されている。政府と事業者による怠慢だけでなく、先住民保護財団の弱体化により先住民は危機的な状況におかれた。ブラジルでは環境ライセンス制度や先住民の保護責任があるにもかかわらず、実際には先住民の情報へのアクセス、協議や参加の機会が制限されている。また、行政の対応は場当たりのものであり、訴訟や占拠を契機にしかなされない。しかしながら、筆者はアマゾンにおける発電所の設置自体を否定しているのではなく、社会・環境的に包摂的なオルタナティブな発電モデルの構築は可能であるとしている。

第6章「土地への闘い：社会的再生産手段としての土地なし農民運動」は、よく知られている土地なし農民労働運動（MST）だけでなく、農地改革のために土地の占拠を行う農民たちの活動も広く対象として含め、土地なし農民運動の背景、詳細なプロセス、そして結果としての人々の生活や社会の変化を明らかにしている。パラ州サンタルバラ市の2つの事例では、労働組合やNGOなどの支援を受けながら二段階の厳しい占拠期間を経て、コミュニティの機能も個人の生活も大きく変化していく様子が描かれている。土地を得ることは自分の人生をコントロールし、未来を決めることであるとの言葉が印象的である。

第7章「ソーシャルデザイン：地域文化の回復」は、経済成長を促す反面、貧困、格差、環境破壊などの問題も生み出した既存のデザインに対して、社会や環境の諸問題の解決や持続可能な社会を目指すソーシャルデザインの活動について考察している。天然

ゴム工芸製品、ヤシ繊維工芸製品、ひょうたん工芸の事例では、新しいデザインの導入により、環境に負荷をかけずに商品の差異化に成功し、生産者に収入だけでなく、尊厳や希望がもたらされた。しかし、地域伝統文化への尊厳の欠如や、市場が狭い一方で費用の点から大都市や海外への流通が困難であるなど課題も指摘されている。

第8章「フェアトレード：生産関係の変革」は、フェアトレードが環境保全と生産者の生活向上にとって重要である一方で、既存の制度では支援が行き渡らない零細な生産者が多いことを指摘し、公正な取引とそれによるアマゾンの持続的な開発を可能とするための取り組みを紹介している。農産物の有機認証に関しては、厳格な審査による従来の認証の他に、販売先や認証マークの使用に制限はあるが認証の費用や手続きが軽減される制度が注目されている。また、アマゾン産製品の生産者と海外の消費者がインターネットを介して直接交渉を行い、両者が詳細な情報を共有することで、公平な対価の支払いと持続可能な開発の維持を目指す取り組みや、公正な取引を達成するうえで先住民の生産者と市場を仲介する「境界組織」が重要な役割を果たしている事例が紹介されている。

第9章「いのちを守る智恵：都市貧困地域のコミュニティで生まれる市民教育」は、子どもが児童労働や性的搾取などの被害を受けやすい状況にあるアマゾン地域において、NGOが実践してきた市民教育の活動をパラ州の市民組織「エマウス共和国運動」を事例として分析している。たとえば、人権をテーマとした演劇の実践は、全てのプロセスを子どもたち自身が行うことにより、子どもたちが主体的な活動を通じて自らの権利を認識し、社会問題を意識化し、そして自分自身の意識で行動できる術を身につけるためのエンパワーメントの実践となっている。

第10章「森を活かして森を守る：アスフローラ（Asflora）の運動」は、零細農家へのアグロフォレストリーの導入や森の管理などを行うNGOのアスフローラ（アマゾン森林友の協会）の活動を詳細に紹介している。民間企業の社会貢献から誕生したアスフローラの活動は、環境教育、薬物依存回復施設への支援、植樹、土壌の改良による森の復元、零細農家へのアグロフォレストリーの導入など多岐にわたる。持続的に森を守り、森を活かしていくためには、子どもたちへの教育や地域住民の意識変革が重要であることも指摘している。

### 3. 本書の意義と課題

本書の最大の特徴は、ブラジル・アマゾンで実践されている様々な民衆の運動の事例が集積されていることにある。執筆者の顔ぶれは多彩であり、ローカルな現場で実際に活動が続けてきた実践者、ジャーナリスト、研究者がその豊かな知識と経験によってそれぞれの事例を厚い記述によって紹介している。環境や社会に対する破壊的



な開発に対する抵抗運動を経てオルタナティブな発展を模索していく様々な試みが、現場を熟知した実際に行動している人々の手によって詳細に記されている本書は、持続可能な開発のフロンティアで何か起きてきたのかを知るための資料としての価値が高いといえる。

各章は農業、教育、デザイン、フェアトレード、森林保護など多様なテーマについてそれぞれ論じられているが、完全に独立したものではなく、章と章の結びつきは緊密である。たとえば、教育は9章の他にも2章で同じく民衆教育、10章では環境教育の重要性について言及があり、森林火災の問題については4章と10章で扱われている。また、環境に負荷をかけない農業の実践として、1章、2章、3章でそれぞれ地域にあった異なる農法が紹介されている。とくに3章で紹介されたトメアス式アグロフォレストリーは6章、10章において他地域への導入について記述され、また10章のアスフローラは6章で土地なし農民運動への支援も行っていることが述べられている。また、デザインの重要性については7章のソーシャルデザインだけでなく、8章のフェアトレードで見ることができる。それぞれの運動やプロジェクトについては各章が考察を深めつつも、他の章と結びつくことによって、読者は全体として抵抗と創造の一つの大きなムーブメントを実感することが可能となる。これだけの多様な民衆運動の事例を、それぞれが有機的に結びつく形で取りまとめられたのは編者の手腕によるものであろう。

最後に、本研究の発展の一つの可能性を挙げたい。ブラジル・アマゾンを超えて、国家のマージナルな地域に住む人々の社会に関する研究との連携である。やや個人的なことではあるが、評者は本書を読み進めながら、これまで行ってきたコロンビアにおける違法作物及び代替開発の問題と重なる部分が多いと感じていた。コロンビアでは国家の統治が及びにくい森林地帯に入植してきた人々が、現金収入の必要が増したことによって麻薬の原料として用いられるコカの栽培を始めた地域が少なくない。これらの土地の中には、登記されておらず不法占拠の状態にあるものも少なくない。コカ栽培のための森林伐採が進み、コカを加工するための化学物質が垂れ流され、児童労働や暴力が蔓延している。従来の強制的なコカの駆除は効果がなく、むしろ、このようなマージナルな環境に置かれている人々を社会の中に包摂していくことが重要であると考えている。実際、違法作物代替開発としてカカオ、コーヒー、アブラヤシ、ゴムなどの代替作物の導入が行われ、NGOによる民衆教育やエンパワーメント、さらに土地取得のための支援も試みられており、本書の類似の事例から多くの示唆を得ることができた。

本書はブラジルのアマゾンを対象としているが、国や地域を問わず持続可能な開発を目指す運動と知識や経験を共有していく可能性を秘めているだけでなく、冒頭で述べたように我々の日常生活や社会のあり方を再考する契機にもなる貴重な文献である。

